

『觀經』三心の哲學的視點

——信仰の眞理性について——

秦 治 人

現代は宗教の意味が不明瞭であつて、従つて信仰が眞理であるところとて言えるのは、宗教が現代にその意義をもつたもののキーポイントである。一般に哲學や自然科学で眞理と言う場合、主観と客観の一致、或いは純粹に客観的な立場で經驗的必然性においてである。

しかし信仰が眞理を名告り、現代にその意味を提示するところとは、どこまでも自己の内に向う、いわば信仰の理性や内観の立場からであつて、經驗の対象や自然を外観として認識するところからではない。従つてそれは私自身の自己の問題であり、人間の問題を現代の苦悩の直中に個別的に問ひ、同時に人間の課題を自己自身に担つて問題にしてゆく立場である。

しかし自己や人間自身について思弁の立場から普遍性や一般的原則として取り扱うところでは、有限なる自己の不安や絶望の事實は捨象されてしまふ。即ち理性が自己や人間を概念として認識する立場は、多くの形而上學的眞理や觀念論がそうである如く、人間の苦悩の現實から出發するのではなく、理性の原則や眞理の前提から出發するのである。理性的主体についての批判をもつてはじめたカントの哲學が、まさに、その理性主体の分析と批判を行い、人間における眞理、經驗の能力と範圍を認識せんとしつつ、究極的には具體的な

人間そのものとは何であるかを問わねばならなかつた如く、理性の立場は、それ自身に満足することが出来ず、やがて現實の主体なる人間の実存を問うところまで進まざるを得ない。

信仰の立場は、このような理性の立場を否定的な媒介として、理性的主体を批判しつつ、個別的、現實的苦悩の場を人間の現實として如何にして自覺的に認識するかということを問うのである。思弁理性でなく、信仰的情熱、信仰的思惟の立場から眞理を探究するところの、信仰の実存の立場がそれである。即ち内観道として眞理を信仰の世界に展開することである。このような信仰が眞理であるという立場はまた仏教的・淨土教的信仰の立場でもある。

さて『觀經』の「一には至誠心、二には深心、三には廻向發願心なり、三心を具する者は必ず彼の國に生ず」の三心とは、信仰的情熱がその願生淨土への内観的思惟の道において、実存の源底に聞きあてられた如來發遣の声である。この三心の要請はしかし、人間の宗教的実存に所与として前提されているからでなくして、むしろ一切の思弁理性や、人間的能力を無効として否定せんが爲である。無有出離の絶望の自覺こそが、苦悩を抱え、苦悩の現實を出離せんとする情熱的思惟の源泉である如く、その思惟のうちに展開された三心必具の道は自性唯心的、自力的求道を逆に批判し、否定するものとして迫り、むしろ、我々の願生求道の事實を批判する原理である。善導において三心の要請は如來の大悲願心、眞實心にひきあてられ、虚仮不實の身としての我々の現實実をうなづかしめる働きこそ、如來の願心の働きであり、如來の眞實が我々の宗教的信仰の在り方を厳しく批判するところが信心（眞理）の世界である。

親鸞が「円融至徳の嘉号は、惡を転じて徳となす正智、難信金剛

の信樂は、疑を除き証を護しむる真理なり」(『教行信証』総序)と述べているが、念仏の信心は、人間の現実をありのままに認識させる。その自覚の内的批判原理こそが如来の信樂であり、その働きが真理といわれるものである。我々の宗教心とは、「念仏まふさんとおもひたつころの発る時」という、念仏せざるを得ない、自己の現実事実を深く信知するという信心の立場をもつとき、その信仰は逆説的に、また如来の信樂に開顯された摂取不捨の世界をも深信了受させるのである。即ち念仏とは我々の悪を惡として領かしめる正智であり、疑網の闇を闇として知らしめる真理の働きが信心である。真如の用とく、絶対の法として理性や現事実の彼岸にあるのでなく、どこまでも本願の念仏申す身と本願を深信する我々の内觀を離れてはない。善導は三心を二種深信の深心一つにおさめ機法二種の真実の姿を聞く以外に我々の信仰の真理はないと示したのであるが、宗教的実践とはかかる、信心の展開においてほかにないと言わねばならない。真如の前提も菩提心の真実性も、自己が真理であるという立場からは可能であつても、念仏申すほかにないという身の事実からは三心必具とは信仰の真理性の厳しい自己反省の原理以外の何ものでもない。浄土教的信仰に於いては、真理認識の有無や存在の真理性を問うのでなく、真実信心を如何にして成就するかがその根本命題である。親鸞は十八願成就の文のうえに、真実信心の主体性における成就のすがたを感得したのであるが、そこでは真実は名号であり、我々はその名号を聞く聞名より、その事実は信心として称名に表現される。真実の働き(真理)は名号、聞名、称名として我々の信心の上に現証するという信仰の真理性の展開がそこにある。即ち如来の真実が、信心として罪障の自覚の上に現成しつつ、信が内觀の生命

『觀經』三心の哲學的視点(秦)

となつて信心内觀の無限の展開を可能ならしめてゆくのである。信心内觀の新しい生活は願生浄土のパトスである。念仏に象徴される願生浄土の道が即、惡を転じ、疑網を除かしむる信心の働きである。

信仰が真理であるということは先きの善導の三心釈に示される如く二種深信の信心一つに摂まるものであるが、そのことは、『觀經』定善・散善の宗教的実践の真理性が、真実信心へと純化内觀せられ、如来の本願に裏づけられる信心の世界を開顯するものである。まさしく定散二門の教は、弘願の念仏門への方便要門ということである。定散の内に必具さるべき三心が、自利真実の道に於いてでなく、利他深信へと転ぜしむる如来の願心として聞き当てられるとき、もはや、自利心の上に三心を止めることであつてはならない。私的なものは一切三心のうちに許されないものである。真理とは自己の内觀に於いて行ぜられつつ、一切の私性を許さないものである。自己の私性や、罪障性の自覚の上では、信仰の真理は真理であるということさえも主張しない。「穢を捨て浄を忻ひ、行に迷ひ信に惑ひ、心昏く識寡く、惡重く鄞多きもの、特に如来の發遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に歸して、専ら斯の行に奉へ、唯斯の信を崇めよ」(『教行信証』総序)、「然るに末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈んで浄土の真証を貶し、定散の自心に迷うて金剛の真信に昏し」(同、別序)とある如く、かくして『觀經』三心の世界は、定散の自性唯心や自力の願生道を内に信知せしめ、かえつてその定散自力に満足しない自己矛盾的な自身の在り方を信心の問題として展開し、信心が信心に満足する、真理としての信仰を本願の念仏道に於いて見出すのでなければならぬ。即ち専ら斯の行に奉へ、唯斯の信を崇めよといわれる所以がそこにある。